

# 都市アレクサンドリアと 初期ヘレニズム時代の東地中海世界

——セーマ・大灯台・図書館——

周 藤 芳 幸

## はじめに

アレクサンドロス大王の没後およそ半世紀にわたって東地中海を舞台に繰り広げられた後継者戦争は、大王が礎を据えた都市アレクサンドリアがヘレニズム文明の中心都市へと発展していく上で、決定的に重要な時代背景を提供した。というのも、ヘレニズム諸王国の支配者たちは、その出発点から互いにライバル関係にあり、自らの支配の正統性を誇示するために、経済的にも文化的にもあらゆる手段を講じて他者に抜きんでようとしたからである。そうした状況にあって、アレクサンドリアという都市が、エジプトの新たな支配者となったプトレマイオスにとってきわめて好都合だったことは言うまでもない。というのも、そこでは、エジプト領域部という豊かな後背地から流れ込む莫大な富を、国際政治の表舞台である地中海のライバルたちに向けたディスプレイに惜しみなく注ぎ込むことができたからである。そこで、本稿ではこの時代状況に目配りをしながら、ストラボンが『地誌』第17巻である程度詳しく述べているアレクサンドロス大王らの墓廟（セーマ）、ファロスの「塔」（以下、大灯台）、そしてそれらとは対照的にストラボンが完全に沈黙しているにもかかわらず、現代ではアレクサンドリアの文化の代名詞ともなっている図書館を検討することで、初期ヘレニズム時代における都市アレクサンドリアの位相を再検討していくことにする。

## 1 セーマ

アレクサンドリアに存在したモニュメントのなかで、後3世紀にいたるまでこの都市とその創建者であるアレクサンドロス大王との結びつきをもっとも強烈に発信し続けていたのが、ストラボンがセーマ（もしくはソーマ）と呼ぶプトレマイオス王家の霊廟にあったアレクサンドロス大王の墓である<sup>1</sup>。ストラボンが述べているように、当時のセーマにはアレクサンドロス大王の遺骸

<sup>1</sup>ストラボンの写本ではソーマと表記されているが、ゼノビオス（Zenob. 3.94）に従ってセーマと修正されるのが一般的である。ただし、偽カリステネスは、ソーマの表記を採っている（Ps.-Call. 3.34.6）。Fraser（1972）II, 32-33. 両者の含意についてはErskine（2002）166-167を参照。

の他にプトレマイオス朝の諸王の遺骸が安置されていたが、ローマ帝政期にセーマに参詣したローマ皇帝たちの関心を惹いたのは、アレクサンドロス大王の遺骸だけだった。ディオ・カッシウスとステニウスの伝える逸話、すなわちアントニウス追討後にセーマに詣でたオクタウィアヌスが、プトレマイオス朝の王たちの墓を示されたときに「私が目にしたいのは王であって死んだ者ではない」と言い放ったというエピソードは、彼らの関心の所在を端的に物語っている<sup>2</sup>。

アレクサンドロス大王の墓に魅了されたのは、ローマ皇帝ばかりではない。近代のアレクサンドリアにおける考古学者の関心は、ひとえに大王の墓探しに向けられてきたといっても過言ではないほどである<sup>3</sup>。その一因は、もちろん史料から得られるセーマに関する情報がきわめて錯綜しており、依然として多くが謎に包まれていることによる。ストラボンの証言から当時のセーマが王宮地区内にあったことは確実であるが、それが具体的にどのような施設だったのか、またヘレニズム時代初期に大王の墓がどこに営まれていたのか等の問題については、史料は何も語っていない。しかし、アレクサンドリアの発展に果たしたセーマの役割を評価するためには、その成立過程に関する史料を再検討することから始めなくてはならないであろう。

前323年6月にバビュロンで急逝したアレクサンドロス大王の遺骸の行方について、ディオドロスは次のように説明している<sup>4</sup>。大王の遺骸は黄金製の人型棺に納められ、その後バビュロンでは2年近くを費やして豪壮をきわめた霊柩車が造られた。それが完成すると、遺骸は霊柩車に載せられ、バビュロンからエジプトに向けて送り出された。エジプトからは亡き大王に敬意を表するためにプトレマイオスが軍勢を引き連れてシリアまで出向き、丁重に遺骸を譲り受けると、さしあたり遺言で指定されていたアモンの聖域には運ばずに、大王自らが創建し「世界でもっとも素晴らしい都市」に発展しつつあったアレクサンドリアに埋葬することを決意した。そこで、プトレマイオスは大王の名声にふさわしい聖域を築いて遺骸を安置し、半神に対するように犠牲を捧げて盛大な競技会を催すことで、人間からだけではなく神々からも報いられた。というのも、彼の慈悲深い寛大さの故に、いたるところから人々がアレクサンドリアにやってきて彼の軍隊に志願したからである。

しかし、他のいくつかの史料は、事態がこのように順調に運んだわけではなかったことを強く示唆している。アレクサンドロス大王の遺骸が、ディオドロスらが伝えるように大王の遺言に従ってエジプトのアモンの聖域に葬られることになっていたのか<sup>5</sup>、あるいはパウサニアスが述べるようにマケドニア王国歴代の王の墓所アイガイに葬られる予定であったのか<sup>6</sup>、不明である。いずれにしても、霊柩車が建造されたからには、大王の遺骸がバビュロンからどこか別の場所に

<sup>2</sup>Dio 51.16.45-47 ; Suet. 2.18 歴代のローマ皇帝によるセーマ参詣については、Saunders (2006) Chap.6 に詳しい。

<sup>3</sup>近代におけるアレクサンドロス大王の墓探しをめぐる珍奇なエピソードの数々については、Saunders の上掲書、及びアンブルール (1999) 145-153 を参照。

<sup>4</sup>Diod. 18.26.1-28.4.

<sup>5</sup>Diod. 18.4.5 ; Just. 13.4.6.

<sup>6</sup>Paus. 1.6.3.

運ばれることは大前提だったのであろう。一方で、霊柩車の建造に2年もかかったことは、パピュロンからマケドニア王国を管理していたベルディッカスの側に、大王の遺骸を手放したくないという思いがあったことを窺わせる<sup>7</sup>。実際、アッリアノスは、霊柩車の建造と遺骸の搬出の責任者だったアリダイオス（アレクサンドロス大王の異母兄でフィリポス4世となったアリダイオスとは別人）がプトレマイオスに内通し、ベルディッカスの意図に反して霊柩車を出発させエジプトに向かわせたと述べ<sup>8</sup>、ストラボンをはじめとする他の史料も、概ねベルディッカスとプトレマイオスとの確執の結果、プトレマイオスがシリアで遺骸を奪ってエジプトに運んだことを示唆している<sup>9</sup>。

大王の遺骸の処遇をめぐるベルディッカスとプトレマイオスとの間に対立があったことは、その後もなくベルディッカスがマケドニア王家の錦の御旗を押し立ててエジプトに武力侵攻したことからも明らかである。しかし、ナイルの渡河作戦に失敗し、多大な犠牲者を出したベルディッカスは、自らが率いてきたマケドニア軍から見放され、彼らによって殺されることとなった。この間の経緯もディオドロスに詳しいが<sup>10</sup>、の中でこの渡河作戦がメンフィスの近郊で行われたとされていることは注目に値する。というのも、先のディオドロスの記述とは裏腹に、いくつかの史料は、エジプトに運ばれたアレクサンドロス大王の遺骸が、当初はメンフィスに埋葬されたと明記しているからである。とりわけ注目されるのは、クルティウスやパウサニアスのような古典史料と並んで、パロス大理石年代記碑文（成立は前264/3年）が前321/0年の事件として、アレクサンドロス大王がメンフィスに埋葬されたこと、及びベルディッカスがエジプトに進軍して殺されたことを採録していることである<sup>11</sup>。

プタハ神の聖地メンフィスは、デルタにおけるエジプト人の宗教・政治上の一大拠点であると同時に、アレクサンドロス大王の滞在中からアレクサンドリアが首都としての体裁を整えるまで、マケドニア王国によるエジプト統治の中心として重要な機能を担っていた。大王の死後にエジプトを掌握したプトレマイオスもまた、メンフィスの神官団との友好的な関係を重視せざるをえなかったはずである。アレクサンドロス大王の遺骸が運ばれてきた段階でアレクサンドリアの都市建設がどれほど進展していたかは不明であるが、おそらく地中海に面したアレクサンドリアは、当時の不安定な国際情勢の下で遺骸を保管するには安全ではないと判断されたのであろう。プトレマイオスは大王の遺骸をメンフィスの権威に託することによって、相互の信頼関係を強化するとともに、ベルディッカスの侵攻に備えようとしたものと考えられる。

<sup>7</sup>Stewart (1993) 222.

<sup>8</sup>FGH 156 F9.25 ; F10.1

<sup>9</sup>Strab. 17.1.8 ; Curt. 10.10.13, 20 ; Paus. 1.6.3 ; Aelian. VH. 12.64

<sup>10</sup>Diod. 18.33-36.

<sup>11</sup>FGH 239 B 11. この史料から、ベルディッカスのエジプト侵攻は一般に前321年のこととされているが (Austin (2006) 71 ; Shipley (2000) 42 ; Bowman (1986) 22 ; Adams (2006) 31)、前320年とする説も有力である (Green (1990) 14 ; Hölbl (2001) 15)。

ペルディッカスがアレクサンドリアには目もくれずベルシオンから一路メンフィスをめざしたのも、大王の遺骸がメンフィスにあったためであろう。ペルディッカスの率いる侵入軍は壊滅したが、一連の事件はメンフィスの神官団にも衝撃を与えたに違いない。偽カリステネスは、メンフィスのエジプト人がいったんは大王の遺骸を同地に迎え入れたが、メンフィスが戦乱に巻き込まれないためには遺骸をラコティスにある王の建設した都市（アレクサンドリア）に埋葬した方がよいという最高神官の指示により、プトレマイオスがアレクサンドリアにソーマを築いて遺骸を埋葬するに至ったと述べている<sup>12</sup>。荒唐無稽なロマンスとして退けられがちな偽カリステネスであるが、大王の遺骸の行方に関しては、ここに描かれた経緯がもっとも史実に近かったのではないかと推測される。

アレクサンドロス大王の遺骸がメンフィスからアレクサンドリアに移された時期は不明であるが、パウサニアスが伝えるようにこの事件から40年もたってからというのは考えにくい<sup>13</sup>。クルティウスが述べるように<sup>14</sup>、ペルディッカス侵攻事件の数年後にはプトレマイオスによってアレクサンドリアに墓が造営され、大王の遺骸はそこに安置されたのであろう。しかし、問題は、この墓とストラボンが報告しているセーマとが同一の施設であるかどうかである。というのも、後2世紀のゼノビオスは、プトレマイオス4世フィロパトルが、彼の時代にセーマと呼ばれている場所に祖先と大王とを一緒に葬る墓所を造営したという伝承を採録しているからである<sup>15</sup>。ゼノビオスの証言を信じるならば、オリジナルの大王の墓とセーマとは別物であり、ストラボンをはじめとする諸史料が言及している施設は後者ということになる<sup>16</sup>。おそらく、ソーマ（遺骸）とセーマ（墓廟）という名称の混乱も、プトレマイオス4世の時代に大王の遺骸の安置所がプトレマイオス朝歴代の王の墓廟<sup>セーマ</sup>に統合されたことに起因するものであろう。ルカヌスによれば、この墓廟はピラミッド状の上部構造を持っていたらしく、その点ではハリカルナッソスの有名なマウソレイオンを想起させるものだった<sup>17</sup>。その遺構は同定されていないが、墓の材質に関する「ガラス製」というストラボンの表現が「アラバスター製」を意味しているならば、アレクサンドリアのラテン墓地にあるいわゆる「アラバスターの墓」は有力な候補となるであろう。この墓は、1936年にA・アドリアーニによって復元されたもので、古代の主要街路の交点に近いその立地は、きわめてセーマにふさわしい<sup>18</sup>。

しかし、それでも残る問題は、セーマに統合される以前のアレクサンドロス大王の墓に関する情報がなぜこれほど乏しいのかという点である。確かに中世まで原形をほぼ保ち続けた大灯台と

<sup>12</sup>Ps.-Call. 3.34.

<sup>13</sup>Fraser (1972) IIa, n.79.

<sup>14</sup>Curtius 10.10.20

<sup>15</sup>註1参照。

<sup>16</sup>Fraser (1972) I, 16.

<sup>17</sup>Lucan. 8.692-9. マウソレイオンとの類似については、Saunders (2006) 74-75を参照。

<sup>18</sup>「アラバスターの墓」については、アンブルール (1999) 145-153. なお、アレクサンドリア中心部のナビ・ダニエル・モスクこそ大王の墓の所在地であるという俗説は依然として健在であり、同モスクでは地下の遺構が大王の墓として公開されている。

一世紀ほどしか使われなかった大王の墓とを対比するのは無理があるかもしれないが、大灯台に関する証言や図像の豊富さに照らしたとき、大王の墓の形状などについて伝える手がかりが乏しいことは意外である。端的に言って、アレクサンドロス大王の墓は、なぜ「古代世界七不思議」の一つに数えられるようなモニュメントとして建造されなかったのだろうか。この問題を解く鍵は、やはり同時代の国際情勢にある。

大王の急逝後、広大な帝国の帰趨をめぐってプトレマイオスら有力な武将たちの思惑は様々に錯綜していたが、彼らにとって共通の関心事は、大王の後継者として自らの新たな支配の正統性を何によって保証するのかという点にあった。その際、大王の遺骸は正統性をアピールする格好のシンボルであり、そうであったからこそペルディッカスとプトレマイオスとのあいだで、熾烈な争奪戦が繰り広げられたのであろう。しかし、このシンボルは諸刃の剣だった。というのも、たしかにこの時点でプトレマイオスはペルディッカスを退けることに成功したが、「大王の遺骸」というシンボルは潜在的にはどの後継者によっても利用可能なものであり、もしプトレマイオスが別な後継者にこのシンボルを奪われるようなことがあれば、それとともに彼のエジプト支配権の正統性も失われてしまう可能性があったからである。明らかに、前4世紀も末になると、後継者たちは、アレクサンドロス大王の後継者であると同時に、それとは独立して自らがその領土における正当な支配者であることをアピールする必要に迫られるようになっていた。プトレマイオスは、前304年に王を称するようになったのを境に、他の後継者に先駆けて、アレクサンドロス大王の代わりに自らの肖像を表現して「プトレマイオス王」と明記したコインを発行するようになるが<sup>19</sup>、このような変化は、彼がこの頃から支配の正統性の源としての大王というシンボルから一定の距離を置き始めていたことを示唆している。このように、アレクサンドリアという都市の地政学における大王の墓の位置づけにはさきわめて微妙なものがあり、その結果、それはマウソレイオンのような規模で築かれるには至らなかったのであろう。大王の遺骸と初期プトレマイオス朝の王たちの遺骸がセーマに合祀されるまでに一世紀近くを要したことも、この微妙なバランスの帰結であったと考えられるのである<sup>20</sup>。

## 2 大灯台

アレクサンドロス大王の遺骸がアレクサンドリアに埋葬されてからまもなく、この都市の玄関口にあたるファロス島に未曾有の規模の建築物が姿を現した。ストラボンが「白い石で築かれた何階もの高さをもつ驚くべき塔」と描写し、古代世界七不思議の一つにも数えられたアレクサンドリアの大灯台である。

<sup>19</sup>Stewart (1993) 231-243.

<sup>20</sup>この点に関連して、プトレマイオス1世から3世までの墓に関してまったく史料が沈黙していることは注目に値する。

大灯台は、さまざまな点でセーマとは対照的な存在である。まず、その場所であるが、ストラポンの記述などからファロス島の東端、その跡地にマムルーク朝の太守アシュラフ・カイトベイが1477年から1480年にかけていわゆるカイトベイ要塞を建設した地点にあったことに疑問の余地はない。この周辺の海底では、1990年代からJ・アンブルールらによって調査が行われており、膨大な数の大灯台の建築部材や各種の彫像などの存在が確認されている<sup>21</sup>。

また、前3世紀の初めに建設され後14世紀に廃墟となったアレクサンドリアの大灯台は、世界でももっとも長く同一の用途で使われ続けた建築物の一つであるだけに、セーマの場合とは異なって、その形態についても旅行家の証言や図像学的な証拠が数多く残されている。たとえば、ヴェネツィアの聖マルコ大聖堂を飾るモザイクには、アレクサンドリアの港に到着した聖マルコの乗る船とともに三層からなる大灯台が表現されている<sup>22</sup>。とりわけ興味深いのは、アレクサンドリアの西方に位置するタボシリス・マグナにある高さ30メートルほどの葬祭モニュメントで、基壇部が四角形、二層目が八角形、三層目が円形のプランをとるそのデザインは、アレクサンドリア大灯台を模したものと考えられている<sup>23</sup>。これらの情報をもとにして、1909年の著名なティアーシュによる研究を筆頭に様々な復元案が提示されてきているが<sup>24</sup>、それらによれば大灯台の高さは100メートルから120メートルに達していたことは確実で、300スタディオン離れても見ることができたとするヨセフスの証言を裏付けている<sup>25</sup>。細部については不明な点も多いが、コインにはしばしば頂上に彫像が表現されており、ゼウス神もしくはポセイドン神の像を戴いていたものと考えられる。

大灯台の建設年代について、スタはピュロスがエピルスの王位についた年（前297年）としているが、これはフレイザーが指摘するようにある程度信頼してよいであろう<sup>26</sup>。通説はこれを建設開始年とし、エウセビオスの伝える前283/2年を完成年としているが、いずれにしても、大灯台がプトレマイオス二世の治世初期までにその雄姿を現していたことは確かである。

大灯台に言及する最古の史料は、同時代の詩人、ペラのポセイディッポスによるエピグラムである。ポセイディッポスはアレクサンドリアの宮廷文化を代表するテオクリトスやカリマコスの同時代人であり、前3世紀後半のパピルスに書かれた112編の詩が2001年になって公刊されたことにより、近年にわかに注目を集めている存在でもある。そのポセイディッポスの作品として、このパピルスの刊行以前にもっともよく知られていた作品は、前161年以前にメンフィスで書かれたパピルスに写された二つのエピグラムだった<sup>27</sup>。これらは、それぞれクニドスのソストラトス

<sup>21</sup>アンブルール (1999) 63-87.

<sup>22</sup>アンブルール (1999) 85.

<sup>23</sup>アンブルール (1999) 223-5.

<sup>24</sup>Thiersch (1909) 図像学的な証拠についてはPicard (1952) を参照。

<sup>25</sup>Joseph. *BJ.* 4.10.5

<sup>26</sup>Fraser 1972, 20.

<sup>27</sup>Gow and Page (1965) *Posidippus* XI, XIII; Obbink (2005) 104-108.

による大灯台の奉納と、サモスのカリクラテスによるアルシノエ・アフロディテ神殿の奉納を扱っている。これらのうち、前者は次のように詠っている。

ギリシア人の救済神として、このファロスの見張りを、  
 おおプロテウス神よ、クニドスのデクシファネスの子ソストラトスが奉納した。  
 というのも、エジプトには島嶼のような山の上の見張り台がなく、  
 船が停泊する防波堤は低いところにある。  
 それゆえ、天空を切り裂いてまっすぐ高々と屹立することで、  
 この塔ははるか遠くからも望むことができる。  
 昼間も、また夜を通じて、波間を進む航海者がただちに、  
 その頂きで燃える大いなる炎を見ることができるよう。  
 こうして、彼は「牛の角」を目指して進み、見逃すことはないだろう、  
 プロテウスよ、このように進む者は救済神ゼウスを。

このエピグラムは、おそらく大灯台にモニュメンタルな碑文として刻まれていたものであり、ストラボンが目にしたのもこの碑文に他ならなかったと考えられる<sup>28</sup>。その内容からも、本来このポセイディッポスの詩が大灯台の頂部に置かれた救済神ゼウス像の奉納を詠ったものであることは明らかであるが<sup>29</sup>、その刻まれた媒体が大灯台の壁面であったために、ストラボンの時代には大灯台そのものの奉納に関わる碑文と誤解されていたのであろう。

一方で、アレクサンドリアの顔ともいべきランドマークに刻まれた碑文に、支配者たるプトレマイオス王ではなくクニドスのデクシファネスの子ソストラトスなる私人の名が現れることは、後世にさまざまな憶測が生まれる原因となったようである。その最たるものは、後二世紀のルキアノスが、「いかに歴史を書くか」と題したエッセイの末尾で、歴史は同時代人ではなく後世の人々に向けて書かれるべきであるという主張の裏付けとして言及するエピソードである。それによると、大灯台を築いたソストラトスは、自分の功績を刻んだ碑文（ストラボンの引用とほぼ同一の文言が使われている）をプラスターで覆い、その上に当時の王の名前を刻んだが、それは表面のプラスターがいずれ剥落し、下から自らの名を刻んだ碑文が姿を現すことを期してのことだったという。大灯台を建築したソストラトスに対して王がその名を刻むことを許したとするプリニウスの説もこれと同工異曲であり<sup>30</sup>、これらの逸話には、大規模なモニュメントに王ではなく私人の名が刻まれていることが、いかにローマ帝政期の人々の目には奇異に映ったかが、よく示されているといえる。

<sup>28</sup>Bing (1998) 27-28. ヘレニズム時代のモニュメンタルな碑文の発生と展開については、Suto (2005) を参照。

<sup>29</sup>Fraser (1972) 18; McKenzie (2007) 42.

<sup>30</sup>Plin. *N.H.* 36.83.

それでは、このクニドスのデクシファネスの子ソストラトスとは、いったい何者であったのか。フレイザーは、ソストラトスを大灯台（より正確には大灯台の救済神ゼウス像）の奉納者ではなく建築家とする史料がいずれもローマ帝政期以降のものであることから、ソストラトスは単なる建築家ではなく、プトレマイオス朝の富裕で影響力のある宮廷人であるとみなす。その根拠として引かれているのが、(1) 中部ギリシアの聖域デルフィ出土の二点の碑文、(2) エーゲ海の聖域デロス島出土から出土した一連の顕彰碑文、(3) 後三世紀の懐疑哲学者セクストゥス・エンペイリコスによる『学者たちへの論駁』の一節である。

これらのうち(1)は、デルフィがソストラトスとその子孫に対してプロクセニアやプロマンティアなどの様々な特権を付与する旨を定めた顕彰碑文<sup>31</sup>、及びソストラトスとアルシノエ・フィラデルフォスに言及する奉納碑文からなる<sup>32</sup>。「クニドス人の宝庫」の近くで出土した前者には、同一の石碑に他の二名のクニドス人への顕彰碑文が刻まれていることから、これがクニドス人としての彼の功績に関わることは間違いない。これに対して、「アテネ人の列柱館」の西端で発見された後者は、明らかに彼のプトレマイオス朝王家との特殊な関係を示している。これに対して、前280年頃から前270年頃にかけてのギリシア世界におけるソストラトスの精力的な政治活動を伝えるのが(2)の史料群である。キュレネのエテアルコスやカウノスの市民団がデロスにソストラトス像を建立したのは、彼から何らかの恩恵を被ったからに他ならず<sup>33</sup>、デロス島を拠点とする島嶼同盟による顕彰決議は、ソストラトスが彼らとプトレマイオス朝との仲介者として同盟に貢献したことを証拠立てている<sup>34</sup>。(3)はずっと時代が下る史料ではあるが、プトレマイオス王からアンティゴノス王のもとに派遣されたソストラトスが、ホメロスの叙事詩の一節を吟じてアンティゴノスに再考を迫ったという逸話を伝えており<sup>35</sup>、やはり彼の政治的手腕がきわめて卓越したものとして後世まで語り継がれていたことを窺わせる。

しかし、これらの史料にまして、この時期の国際政治の展開に果たしていたソストラトスの役割の大きさを再評価させることになったのが、1971年にアテネのアゴラで発掘されたスフェットス区のカリアス顕彰決議碑文である<sup>36</sup>。この碑文によれば、前286年にアテネ市民団が攻城王デメトリオスの支配に対して反乱を起こしたとき、プトレマイオス朝の傭兵軍指揮官としてエーゲ海のアンドロス島に駐留していたカリアスは、プトレマイオス1世の意を受けて一千名の兵士とともにアテネ市民団を救援すべくアテネ中心市に急行するとともに、アテネ領域部でも食糧となる

<sup>31</sup>FD III 1: 299.

<sup>32</sup>Inv. 6717, Amandry (1940) 63-64. 報告者のアマンドリは、これをソストラトスが当初プトレマイオス二世への奉納像を建立し、後に王妃アルシノエと合祀したものと推測しているが、フレイザーは逆にアルシノエが奉納したソストラトス像のための銘文とみる。Fraser (1972) IIa, n.121.

<sup>33</sup>IG XI, 4 1190 (キュレネのエテアルコスによる奉納); IG XI, 4 1130 (カウノス市民団による奉納)

<sup>34</sup>IG XI, 4 1038 なお、デロスの市民団も、単独でソストラトスとその子孫をプロクセノスに任命している。IG XI, 4 563.

<sup>35</sup>Sext. Emp. Adv. Gramm. 1.276.

<sup>36</sup>Shear (1978)



収獲物の確保などに奔走した。そして、いよいよアテネがデメトリオス軍に取り囲まれると、プトレマイオス一世はアテネのためにソストラトスを派遣し、デメトリオスとの和約について協議する使節をピレウスに招集させた。その際、カリアスはアテネ市民団を代表する使節としてアテネのために全力を尽くし、和平が締結されるまで兵力とともにボリスにとどまり、プトレマイオス王のもとに戻ってからも、アテネ市民団が派遣した使節と協力し、万事にわたってアテネに有利に運ぶよう尽力したとされる。

この碑文中では、ソストラトスが何者かについては何も述べられていないが、この碑文を校訂したL・シアは、彼がプトレマイオス一世によって派遣されていること、敵のデメトリオスの掌中にあったピレウスで和平のための協議を公然と主宰することができたこと、ソストラトスという名前だけで誰であるかがアテネ市民団には一目瞭然だったことから、このソストラトスがアレクサンドリアの大灯台に関わった有名なソストラトスと同一人物であると断定する<sup>37</sup>。

これらの一連の史料は、クニドスのソストラトスがプトレマイオス一世に重用されたエジプトの宮廷人であったばかりではなく、他の後継者からも一目置かれ、当時の東地中海世界の情勢に広く影響力を及ぼすことのできた国際的な有力者であったことを示している。建築家としてであれ奉納者としてであれ、彼がアレクサンドリアの大灯台の建設に貢献したのも、東地中海を舞台とする国際政治のフィクサーとして、視覚的にも機能的にもエジプトを東地中海と強固に結びつけるモニュメントに強い関心を抱いていたからではないだろうか。実際、アレクサンドリアの大灯台によって利益を得たのは、プトレマイオス朝の経済的繁栄を享受することのできた東地中海の海上交易に従事する商人たちだったと推測されるのである。

### 3 図書館

ヨーロッパ風の瀟洒な高層住宅が立ち並ぶアレクサンドリアの海岸通の一画に、2002年の秋、宇宙船が舞い降りたような巨大な建物がオープンした。あたりの風景から完全に遊離したこの近未来的な建物の名は、ビブリオテカ・アレクサンドリナ。1974年にその構想が具体化してから四半世紀あまりの歳月を経て完成した、現代版アレクサンドリア図書館である。アレクサンドリア図書館とは、いうまでもなくプトレマイオス朝の庇護のもとで数十万巻に及ぶ膨大な蔵書を誇っていた古代世界の知の殿堂のことである。地中海に向かって陽光を眩く照り返すガラス張りの屋根の下に、800万冊を収蔵できる図書室をはじめとして、カンファレンス・ホールや地下博物館などの施設を配したこの建物は、もちろん古代のアレクサンドリア図書館の文字通りの復元ではない。しかし、この斬新なデザインの建物は、アフリカ、ヨーロッパ、アジアの諸文明の結節点として繁栄してきた都市アレクサンドリアの新しい顔として、この地を訪れる人々に、二千年も前に試みられていた「人類の叡智の結集」という偉業へと思いを向けさせずにはおかないだろう。

<sup>37</sup> Ibid. 23

ハード面でのアレクサンドリアの誇りがファロス島の大灯台であったとするならば、ソフト面におけるアレクサンドリアの名声を支えることになったのが、名だたる学者を擁するムーセイオンと図書館だった。いかに巨大建築物が印象的であるとはいっても、ハード面の技術には自ずと限界がある。それを補うのが、あらゆる学芸や知識のコレクションというソフトの充実であることは、ヘレニズム諸王国の支配者たちにもよく認識されていた。それにしても、なぜ図書館が選ばれたのだろうか。

古代ギリシア世界では、遅くとも前5世紀の末頃までには、パピルスに書かれた巻物の本が流通するようになっていた。アテネのアゴラには本屋があり、哲学者ソクラテスの弟子の一人である美青年のエウテュデモスは、弁論や業績において他の若者に優越するために、そのような書巻を大量に蒐集していたと伝えられている<sup>38</sup>。しかし、書巻の蒐集という行為に特別な意味が与えられるようになったのには、何とんでも哲学者アリストテレスの存在が大きい。観念論的な師のプラトンの哲学の場合とは対照的に、しばしば経験主義的と評されるアリストテレスの哲学の営みを支えていたのは、実証的なデータを集めて相互に比較検討するという作業だった。万巻の書物を集めた図書館を創るというアイディアは、哲学に対するこのようなアリストテレスの考え方の延長上に生まれてきたのである。

図書館に集積されたデータが発揮する力については、アレクサンドリア図書館を舞台とする次の逸話が雄弁に物語っているだろう。ウィトルウィウスによれば、プトレマイオス王（おそらく3世か4世）が詩のコンクールを主宰したとき、市民から選ばれた七人の審査員のうち、アリストファネスという男だけが他の審査員とまったく異なる審査結果を下した。その理由を問われたアリストファネスは、他の審査員が上位とした詩人の作品がすべて剽窃であると指摘し、自ら図書館から探し出してきた書巻を示しながら、出典を明らかにして見せたのである。その結果、剽窃をした詩人たちは追放され、アリストファネスは図書館長に推挙された。この逸話の信憑性はさておき、そこからは、この時期に図書館の重要さが広く認識されるようになっていたことが窺われる<sup>39</sup>。

実は、プトレマイオス1世は、いくつかの糸によってアリストテレスと結ばれていた。前342年にフィリポス二世が息子アレクサンドロスの家庭教師としてアリストテレスをマケドニアに招聘したとき、プトレマイオスもまたアレクサンドロスの学友としてその薫陶をうける機会があったと考えられる。おそらくそれを範として、プトレマイオスは自分の息子（プトレマイオス2世フィラデルフォス）の家庭教師として、アリストテレスの学園リュケイオンにおける彼の後継者テオフラストスを招聘しようとした。これは結局実現せず、代わりにテオフラストスの弟子のストラトンが家庭教師となったが、このような経緯にも、アリストテレスを祖とするいわゆる逍遙学派の思想に対するプトレマイオス1世のこだわりを見て取ることができる<sup>40</sup>。しかし、少なくとも

<sup>38</sup> Xen. *Mem.* 4.2.9.

<sup>39</sup> Vitruv. 7.4-7. エル＝アバディ (1991) 107-110.

<sup>40</sup> Huß (2001) 236f.

も図書館の構想という点でプトレマイオス一世に大きな影響を与えたのは、やはりテオフラストスの高弟であったファレロンのデメトリオスだとするのが妥当であろう<sup>41</sup>。

アテネ市民であり、ファレロン区に籍があったためにファレロンのデメトリオスと通称されるこの人物は、リュケイオンでテオフラストスに学んだ後、前325年頃からアテネの政界で活躍するようになった。とりわけ、マケドニアのカッサンドロスの治下で、彼は事実上のアテネの独裁者として辣腕を振るったが、アテネがアンティゴノスの子デメトリオスによって解放されると亡命を余儀なくされ、最終的にはエジプトのプトレマイオス1世の宮廷に身を寄せることになった。アレクサンドリアに、アテネのリュケイオンをモデルとする学者の楽園ムーセイオンを設け、その図書館に万卷の書を蒐集するというアイデアは、その後ふたたび祖国の地を踏むことができなかった哲人政治家、ファレロンのデメトリオスの悲願が、他の後継者を凌ごうとするプトレマイオス1世の野望と結びついたときに生まれた可能性が高い。

しかし、アレクサンドリア図書館の実像は、その名声の高さとは裏腹に、きわめて曖昧模糊としている。というのも、ストラボンがムーセイオンに言及しながら図書館については沈黙を守っており<sup>42</sup>、情報の多くはローマ帝政後期から中世にかけて書かれた注釈書などに由来しているからである。たとえば、大図書館に関する一般向けの概説書は、しばしば図書館の分館がアレクサンドリア市内のセラピス神殿（現在「ポンペイの柱」という俗称で知られているディオクレティアヌス帝の記念柱が残っている遺跡）にあったことを自明のここのように述べている。しかし、セラピス神殿の図書館に言及する最古の史料は後2世紀末のテルトゥリアヌスであり、それが大図書館よりも小規模で「姉妹」と呼ばれたことを証言するエピファニオスは後4世紀になってからの著述家に過ぎない<sup>43</sup>。たしかに、定礎の際に奉納された銘板からアレクサンドリアのセラピス神殿がプトレマイオス3世の時代に創建されたことは確実だとしても、それは決して分館の年代が前3世紀の後半にまで遡ることを保証するものではないのである。

大図書館に膨大な書巻が蔵されるようになった過程についても、事情は同様である<sup>44</sup>。しばしば、アレクサンドリアでは入港するすべての船舶の船荷を調べ、もし本が見つかった場合には没収して図書館に運び、持ち主には写本を返却していた（そのような本には「船から」というラベルが貼られていた）といわれる<sup>45</sup>。また、プトレマイオス3世は、写本を作るという口実で15タラントンの保証金と引き替えにアテネの公文書館から三大悲劇詩人の劇作品のテキストを取り寄せ、現物は返さずに写本の方を送り返したとも伝えられる。しかし、これらの逸話は、いずれも後2世紀に、ペルガモン出身のガレーノスが、ヒポクラテスの著作の真偽に関連して付随的に述べていることでしかない。大図書館創設の重要な契機となったと推測されるアリストテレスの蔵

<sup>41</sup> エル＝アバディ（1991）69.

<sup>42</sup> これは、より同時代に近いヘロンダスの場合も同様である。Herod, *Mim.* 1, 26f.

<sup>43</sup> 関連史料については、野町（2000）79-81.

<sup>44</sup> エル＝アバディ（1991）86-96.

<sup>45</sup> エル＝アバディ（1991）89-90.

書の入手事情についても、それがテオフラストスの手を経てネレウスに受け継がれたことはおそらく事実だとしても、プトレマイオス王がそれをネレウスから買い取り、アテネとロドスで購入した書巻と合わせてアレクサンドリアに運ばせたとする説は、ガレーノスと同時代の著作家アテナイオスを典拠としており、その史実性は疑わしい<sup>46</sup>。

もちろん、「アリストテレスの手紙」という問題の多い史料が伝える聖書のヘブライ語からギリシア語への翻訳(セプトウアギンタ)が、プトレマイオス2世の時代に図書館の主導で行われた可能性は十分にあり、プトレマイオス二世とマウリア朝のアショカ王との外交関係を考慮すれば、インドの仏典がここに収蔵されていたことを疑う理由はない<sup>47</sup>。しかし、結局のところ、フレイザーが述べているように、アレクサンドリア図書館の歴史とは、その歴代館長の列伝に尽きているのである<sup>48</sup>。

実際、アレクサンドリア図書館の歴代館長は、当代一流の学者によって占められていた<sup>49</sup>。周知のように、初代館長とされるゼノドトスは、初めてホメロスの叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』のテキストを批判的に検討し、それぞれを現在見るように24の巻に校訂したと伝えられる。その後継者であるロドスのアポロニオスは、ヘレニズム時代を代表する叙事詩『アルゴナウティカ』の作者であると同時に、プトレマイオス2世の宮廷では、息子プトレマイオス3世の家庭教師として重用されていた。その後任に抜擢されたのが、地球の全周を算出したことで有名な全能の学者エラトステネスであり、彼もまたプトレマイオス3世から、息子プトレマイオス4世の家庭教師に任じられている。このように、図書館長の職は、プトレマイオス王家の教育とも密接に結びついていた点で、ムーセイオンの学者の地位よりも、政治的な重要性を帯びていたといえる。その意味で、大図書館は単に宮殿の敷地内にあったばかりではなく、宮廷そのものの一部をなしていたのである。それでは、モニュメントとしての図書館は、いったいどのような建築物だったのだろうか。

まず、図書館の立地であるが、この点についての重要な手がかりは、皮肉なことにこの大図書館が失われた経緯にかかわるプルタルコス『カエサル伝』にある<sup>50</sup>。それによると、紀元前48年の夏、アレクサンドリアで将軍アキラスが率いるエジプト軍に攻囲されて窮地に陥ったカエサルは、港に停泊していた敵の船に火を放った。ところが、この火は、おそらく折からの季節風にあおられて南の宮殿地区にも燃え広がり、それによって大図書館も烏有に帰したのだという<sup>51</sup>。これによれば、大図書館は後代の史料が伝えるようにアレクサンドリアの市街の北側の宮殿地区の

<sup>46</sup>Athen. 1 3a-b ; Fraser (1972) IIa, Ch.6, n.100.

<sup>47</sup>少なくともロドスのカリクセイノスによる有名なパレードの記述には、インド産の犬や牛が登場する。アショカ王の王令については、Fraser (1972) II, 311, n.389.

<sup>48</sup>Fraser (1972) I, 322.

<sup>49</sup>野町 (2000) 第3章を参照。

<sup>50</sup>Plut. Caes. 49. Fraser (1972) I, 334-5. Aul. Gell. 7.17.3 ; Sen. Tranq. 9.5 ; Oros. 6.15.31-2

<sup>51</sup>ただし、この事件によってどの程度の蔵書が失われたかをめぐっては、さまざまな説がある。Barnes (2000) 70f.

一画を占め、おそらく海に面していたと考えられる。パピルス書巻を収める建物が海に面していたという想定には、パピルスの保存という観点から異論もあろうが、建設当初から地中海からの風が吹き抜けることを考慮して設計されたアレクサンドリアでは、海に面していなくても条件はあまり変わらなかったであろう。

次に検討の対象になるのは、建物としての外観である。この点については、何よりもそれが独立した建物であったかどうかが大いなる問題になる<sup>52</sup>。というのも、図書館と訳しているビブリオテケーというギリシア語は、直訳すれば「本の置き場」であり、必ずしも独立した建物を指すものではない。実際、ウィトルウィウスは、この語を（ラテン語ではあるが）邸宅のなかの一室、すなわち図書室の意味で用いているばかりではなく<sup>53</sup>、アレクサンドリアに次ぐ同時代の有名なビブリオテケー、すなわちペルガモン王国にあるエウメネス2世の図書館は、アテナ神殿の聖域の一部であって、完全に独立した建物ではない。

しかし、これらの点は、逆にアレクサンドリアの大図書館が独立した建物であった可能性を排除するものではない。ウィトルウィウスの関心はあくまでローマ帝政期における建築の技術に向けられており、上述したような競争意識によって突き動かされていたヘレニズム王国の公共建築物のことは彼の念頭にはなかったであろう。ペルガモンの図書館が独立した建物でなかったことも、ペルガモンの都市そのものが海拔約300メートルの丘の狭い頂にひしめくように築かれていたことを考慮しなくてはならない。アレクサンドロス大王によって設計され、プトレマイオス1世の時代にはまだ空きスペースが豊富にあったはずのアレクサンドリアとは、同一に論じられないのである。むしろ、アレクサンドリアの都市の発展期に構想されたこと自体が、大図書館が独立した建物であったことを示唆しているともいえる。

次の問題は、規模である。大図書館の規模を考える際の決め手となるのは、もちろんここに収蔵されていたパピルスの巻数である<sup>54</sup>。しかし、この点についても、信頼できるデータが存在するわけではない。約50万冊という具体的な数字に言及するツェツェスは、中世もかなり遅い時期の著述家であり、信頼度は低いと考えざるを得ない。一方で、ペルガモンの図書館については、プルタルコスが少なくとも20万巻という数字をあげていることから、アレクサンドリアの図書館はこれをはるかに凌駕する巻数のパピルスを取っていたはずである。これらの点からは、巷間に流布している約70万巻という数字も、マクシマムとしてはあながち見当はずれとはいえないであろう。

しかし、図書館がそれほど大規模な建物であったならば、なぜそれが古代七不思議に含められなかったばかりか、史料にも建物のことが言及されていないのだろうか。古代七不思議の方は、既に灯台が存在する以上、アレクサンドリアからもう一つを加えることは意図的に避けられたのかもしれない。しかし、史料に図書館の建物が言及されないことには、何らかの特別な理由が

<sup>52</sup>Fraser (1972) I, 324.

<sup>53</sup>Vitr. 6.4.1

<sup>54</sup>図書館に収蔵されていたパピルスの巻数に言及する諸史料については、Fraser (1972) I, 328-329.

あったはずである。一つの可能性は、上述したようにそれが独立した建物ではなかったことに求められるかもしれない。しかし、何らかの建物に附属していたとしても、これだけの巻数を収めるためのスペースは、いやでも人々の目を引いたはずである。

それでは、規模こそ特段に大きかったものの、何らかの理由でその建物がとりたてて同時代人々から注目されなかったということは、ありうるだろうか。実は、そのような条件を満たすことのできるこの時代の建築様式が一つだけ存在する。それが、円柱の並ぶ吹き抜けの回廊を特徴とする列柱館という様式である。この時代、プトレマイオス朝のライバルの一つであるアンティゴノス朝マケドニアの都ペラでは、宮殿に長さ約160メートルの規模の巨大な列柱館が築かれていた<sup>55</sup>。ベルガモンの王たちも、アテネに大規模な列柱館を寄進している。ほぼ同時代に都市開発が進められたアレクサンドリアでも、大規模な公共建築物には列柱館という様式が採用されるのが通例であっただろう。もし、大図書館もまた外観においてはごくありふれた列柱館だったとしたら、古代の著述家たちが特に図書館の建物について言及しなかったことも説明がつくのではないだろうか。プトレマイオス朝時代のセラピス神殿に大図書館の分館があったとする説が確実なものではないことは上述した通りであるが、この点に関して、セラピス神殿の周壁の東翼部分が列柱館として設計されていることは、注目に値する。

アレクサンドリア図書館をこのように巨大な列柱館として復元するならば、これまで難問とされてきた図書館とムーセイオンとの関係にも、一定の見通しが立てられるであろう。ムーセイオンとはもともと学術の女神ムーサイを祀る聖域のことであり、ストラボンの記述からも明らかなように、さまざまな施設を内包する空間を指していた。一方で、図書館としての列柱館は、膨大なパピルス書巻を収蔵しなくてはならなかったために、中央部に広大な中庭を配することを余儀なくされた。このような空間は、アリストテレス以来の逍遙学派の伝統を継ぐアレクサンドリアの学者たちに、格好の学問の場を提供することができたはずである。すなわち、大図書館とムーセイオンは建築施設としては一体だったのであり、そのために古代の史料は両者を区別して言及することがなかったと考えられる。

アレクサンドリア図書館をめぐる謎は尽きないが、こうして復元された建物の姿は、大図書館が古代における最大の学問拠点ムーセイオンを包摂する施設だったことを強く示唆しているのである。

## おわりに

都市アレクサンドリアを代表するモニュメントとしてのセーマ、大灯台、そして図書館の成立は、それぞれにヘレニズム世界におけるプトレマイオス朝の卓越した発展に大きく貢献することになった。

---

<sup>55</sup>周藤・澤田(2004)176-7.

アレクサンドロス大王の急逝後、エジプトを統治することになったプトレマイオスは、ペルディッカスから大王の遺骸を強奪してメンフィスに葬ることで、大王が築いたマケドニア王国という旧来の枠のなかでの自らの支配権に正統性を付与することに成功した。その後、遺骸はアレクサンドリアに移されたが、プトレマイオスの支配者としての位置づけが「太守」から「王」に変質する過程で、大王の遺骸の持つ意味も相対的に変化を余儀なくされた結果、その墓廟はモニュメントとしては控えめなものに留められたと考えられる。この墓廟がようやくプトレマイオス朝歴代の王の墓所と統合され壮麗なセーマとして整備されたのは、大王の没後百年あまりたってからのことだったが、それはプトレマイオス朝にとってヘレニズム世界に共通の支配のアイコンであるアレクサンドロス大王との「接続」がいかに微妙な問題であったかを窺わせている。

次に、大灯台の成立事情は、初期のプトレマイオス朝の経済的発展がいかに深く東地中海世界と結びついてきたかを、鮮明に浮かび上がらせている。確かに、ストラボンには内陸からもたらされる物資の豊かさを強調してはいるが、それらの物資の役割は、プトレマイオス朝の興隆期と彼が実際に目にした滅亡後とは、大きく異なっていたであろう。そして、アレクサンドリアが東地中海交易の拠点としての地歩を占める上では、クニドスのソストラトスのようなエーゲ海島嶼部の有力者の協力が不可欠であったと想定される。初期のプトレマイオス朝は、国内にあってはメンフィスの神官団をはじめとするエジプトの在地エリートと交渉を重ねつつ、外に向かつてはギリシア世界の複雑な国際関係を御することのできるギリシア系エリートを「王の友人」として宮廷で厚遇することで、政治的な発展を遂げていったのであろう。大灯台は、そのプトレマイオス朝の繁栄に実質的に貢献するとともに、それを外部世界に発信するための格好のモニュメントとして構築されたと考えられる。

さらに、大図書館における知の蒐集は、おそらくプトレマイオス朝が経済的な側面においてのみならず学術的な側面においても他の後継者の王国を凌ぎ、確固たる地位を確立しようとする積極的な意図のもとで遂行されていった。その機能が単なる文献の蒐集だけではなく、ホメロスの叙事詩の校訂と定本確定にまで及んだことは、きわめて示唆的である。というのも、ホメロスの叙事詩は、ポリス世界が成立した前8世紀以降、ギリシア人にとってポリスの違いを超えた集合的なアイデンティティの結節点として機能していたからである<sup>56</sup>。よく知られているように、アレクサンドロス大王は『イリアス』の校訂本を陣中に携行し、アレクサンドリアの土地の選定にあたって、ホメロスの叙事詩の一節が大きな役割を果たしたと伝えられている。その点で、ポセイディッポスが、大灯台への奉納碑銘をプロテウスに呼びかける形で創作したもの、きわめて当然だったといえよう。

このように、本稿で扱ったモニュメントは、ポリス世界がアレクサンドロス大王を介してヘレニズム世界に移行する過程において、アレクサンドロス大王という圧倒的なシンボルと並んで、流動的な社会状況を秩序立てるカノンとしてホメロスの叙事詩が再評価され、それらがともにア

<sup>56</sup>周藤 (2006) 172.

レクサンドリアという新たな世界の中心の創出にあたって大きな役割を果たしていったことを雄弁に物語っているのである。

### 参考文献

- J = Y・アンブルール (周藤芳幸 監訳) (1999) 『甦るアレクサンドリア 地中海文明の中心都市』 河出書房新社  
 M・エル＝アバディ (松本慎二 訳) (1991) 『古代アレクサンドリア図書館』 中公新書  
 周藤芳幸 (2006) 『古代ギリシア 地中海への展開』 京都大学学術出版会  
 周藤芳幸・澤田典子 (2004) 『古代ギリシア遺跡事典』 東京堂出版  
 野町 啓 (2000) 『謎の古代都市 アレクサンドリア』 講談社現代新書
- Adams, W.L. (2006) The Hellenistic Kingdoms, in G.R. Bugh (ed.) *Hellenistic World*, Cambridge, 28-51.  
 Amandry, P. (1940) Dédicaces delphiques, *BCH* 64-5 (1940) 60-75.  
 Austin, M.M. (2006) *The Hellenistic World from Alexander to the Roman Conquest: A Selection of Ancient Sources in Translation*, 2<sup>nd</sup> ed., Cambridge.  
 Barnes, R. (2000) Cloistered Bookworms in the Chicken-Coop of the Muses: The Ancient Library of Alexandria, in R. MacLeod (ed.) *The Library of Alexandria*, Cairo, 61-77.  
 Bing, P. (1998) Between Literature and the Monuments, in M.A. Harder et al. (eds.) *Genre in Hellenistic Poetry*, Groningen, 21-43.  
 Bingen, J. (2007) *Hellenistic Egypt: Monarchy, Society, Economy, Culture*, Edinburgh.  
 Bodel, J. (ed.) (2001) *Epigraphic Evidence: Ancient History from Inscriptions*, London.  
 Bowman, A.K. (1986) *Egypt after the Pharaohs 332BC – AD 642*, London.  
 Burstein, S.M. (1991) Pharaoh Alexander: A Scholarly Myth, *Anc Soc* 22, 139-145.  
 Dueck, D. (2000) *Strabo of Amasia: A Greek Man of Letters in Augustan Rome*, London.  
 Erskine, A. (2002) Life After Death: Alexandria and the Body of Alexander, *Greece and Rome* 49, no.2, 163-179.  
 --- (ed.) *A Companion to the Hellenistic World*, Oxford.  
 Fraser, P.M. (1972) *Ptolemaic Alexandria*, 3 vols., Oxford.  
 Gow, A.S.F. and D.L. Page (ed.) (1965) *The Greek Anthology: Hellenistic Epigrams*, Cambridge.  
 Gutzwiller, K. (ed.) (2005) *The New Posidippus: A Hellenistic Poetry Book*, Oxford.  
 Harris, W.V. and G. Ruffini (eds.) (2004) *Ancient Alexandria between Egypt and Greece*, Leiden.  
 Huß, W. (2001) *Ägypten in hellenistischer Zeit 332-30 v.Chr.*, München.  
 McKenzie, J. (2007) *The Architecture of Alexandria and Egypt c. 300 BC to AD 700*, New Haven and London.  
 Obbink, D. (2005) New Old Posidippus, Old New Posidippus, in K. Gutzwiller (ed.) *The New Posidippus: A Hellenistic Poetry Book*, Oxford, 97-115.  
 Picard, C. (1952) Sur quelques représentations nouvelles du phare d'Alexandrie et sur l'origine alexandrine des paysages portuaires, *BCH* 76, 61-95.  
 Rowlandson, J. (2003) Town and Country in Ptolemaic Egypt, in A. Erskine (ed.) *A Companion to the Hellenistic World*, Oxford, 249-263.  
 Saunders, N. (2006) *Alexander's Tomb: The Two Thousand Year Obsession to Find the Lost Conqueror*, New York.  
 Shear, T.L. Jr. (1978) *Kallias of Sphettos and the Revolt of Athens in 286 B.C.*, Hesperia Suppl. XVII, Princeton.  
 Shipley, G. (2000) *The Greek World after Alexander 323 – 30 BC*, London.  
 Thiersch, H. (1909) *Pharos: Antike Islam und Occident*, Leipzig.  
 Stewart, A. (1993) *Faces of Power: Alexander's Image and Hellenistic Politics*, Berkeley and Los Angeles.  
 Suto, Y. (2005) Local Epigraphic Habit and the Genesis of Monumental Inscriptions in Ptolemaic Egypt, in S. Sato (ed.) *Genesis of Historical Text: Text/Context*, Nagoya, 13-22.



**Abstract**

Alexandria and the Eastern Mediterranean World in the Early Hellenistic Times:  
Sema, Lighthouse, and Library

Yoshiyuki SUTO

The newly-founded capital of Alexandria was a vital medium for the Ptolemies to project their power and prestige toward the rival Hellenistic monarchies, though the process of its formation and the nature of the monument erected in the city are still to be elucidated. In this paper the author reexamines the evidence concerning the three prominent monuments of Alexandria, *sema*, *lighthouse*, and *library*, in order to put them in their proper historical context. These monuments testify the pivotal role of the city in the advent of the new social order of the Hellenistic period.